Ⅱ ヒスイについて

ヒスイは深緑の半透明な宝石の一つです。縄文時代から装飾品などに加工されてきました。

縄文時代の遺跡から見つかるヒスイ製品は、原材料となるヒスイ原石がどこで採取されたものなのか分かっていませんでした。昔は国内にはヒスイの産地が見つかっていなかったため、海外から輸入されたものではないかという説もありました。しかし、新潟県糸魚川市の姫川の支流にヒスイ産地があることが分かり、さらにヒスイを加工した縄文時代の遺跡（攻玉遺跡）も見つかり、日本国内でヒスイ原石を採取して加工していたことが分かりました。現在では、国内で見つかるヒスイ製品は、そのほとんどが糸魚川市のヒスイ産地から各地に運ばれたことが分かっています。

郡山市内でも、馬場中路遺跡（西田町）、町B遺跡（西田町）、柳橋遺跡（中田町）などでヒスイ製品が見つかっています。特に馬場中路遺跡のヒスイ製大珠は、全体の半分が欠損していますが、完全な形で残っていたら20cm近くにもなったと思われる大きなものです。

これらの郡山市内で見つかったヒスイ製品も、糸魚川市のヒスイ産地から運ばれてきたものと思われます。

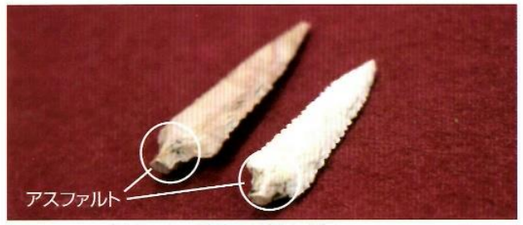
馬場中路遺跡出土ヒスイ製大珠

Ⅲ アスファルトについて

町B遺跡出土アスファルト塊

アスファルトは水素と炭素の化合物で、原油を産出する地域で採取できます。縄文人たちもアスファルトを利用していたことが分かっています。現代のアスファルト利用法としては道路の舗装がおなじみですが、縄文人たちは主に接着剤として利用していました。郡山市でも、西田町の町B遺跡や逢瀬町の四十内遺跡などでアスファルトが見つかっています。石鏃を矢柄に固定するのに使用したり、割れた土器や土偶を補修するのに使用したりしていたようです。

日本のアスファルト産地は、秋田県、山形県、新潟県など日本海側にあります。かつて郡山市に住んだ縄文人たちも日本海側の産地との交易でアスファルトを入手したものと思われます。



アスファルトが付着した石鏃（町B遺跡出土）

アスファルトが付着した土偶（町B遺跡出土）

大安場史跡公園 平成30年度 第2回企画展「縄文時代の地域交流」

会 期：平成30年10月27日(土)～12月9日(日)　会 場：大安場史跡公園ガイダンス施設
主 催：郡山市／郡山市教育委員会／大安場史跡公園（公益財団法人郡山市文化・学び振興公社）
協 力：長岡市立科学博物館

大安場史跡公園（公益財団法人郡山市文化・学び振興公社）

〒963-1161 福島県郡山市田村町大善寺字大安場160番地　TEL.024(956)1088　FAX.024(956)1090
E-Mail oyasuba@bunka-manabi.or.jp　Web http://www.bunka-manabi.or.jp/oyasuba

VEGETABLE OIL INK

FSC www.fsc.org ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C010137

この印刷物はFSC®認証紙です。紙へリサイクル可。

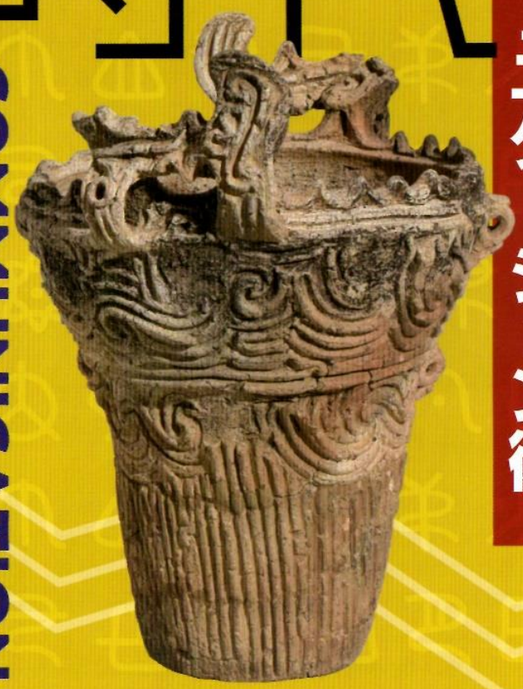
大安場史跡公園 平成30年度 第2回企画展

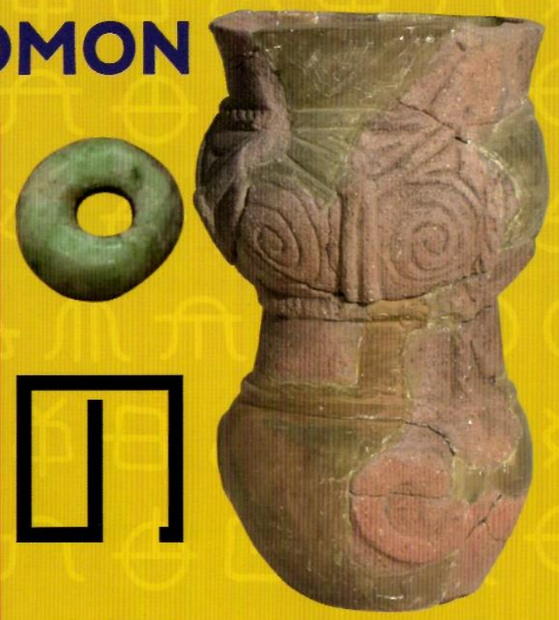
縄文時代の地域交流

JOMON

縄文流コミュニケーション術。

COMMUNICATION





縄文時代の遺跡を調査すると、原産地が限られている「ヒスイ」や「アスファルト」などが見つかることがあります。また、煮炊きに使われていたと思われる土器にも、他地域の影響が見られるものがあります。
今回の展示では、このような他地域との交流を示す遺物から、縄文人たちの交流範囲の広さをご紹介します。

大安場史跡公園
公益財団法人郡山市文化・学び振興公社

Ⅰ 土器について

縄文土器は地域ごとに独特な特徴を持っており、その特徴は時期によっても変化します。同じ特徴を有する土器群をグループとしてまとめると、地域・時期ごとのまとまりが見えてきます。

東北地方南部に位置する福島県は関東地方と北陸地方に接しており、両地方から影響を受けたと思われる土器が見つかることがあります。郡山市でも新潟県で流行した火焔型土器の影響を受けたと思われる土器が多数見つかっており、関東地方の勝坂式の影響を受けたと思われる土器も見つかっています。

鴨打A遺跡出土
勝坂式土器

勝坂式土器

勝坂式土器は関東・中部地方に分布する縄文時代中期前葉～中葉の土器です。東京都・神奈川県・山梨県・長野県に多く分布します。

多様な文様を用いるのが特徴で、その装飾性は縄文土器の中でもかなり高いものと言えるでしょう。特に、生物を想起させる抽象的文様（人面把手、蛇体文など）は勝坂式の大きな特徴の一つです。文様施文手法としては、縄文をあまり多用せず、棒状工具による刻み目などを用います。同じ勝坂式でも、地域や時期によって変化もあります。

郡山市の鴨打A遺跡で、この勝坂式土器が見つかりました。勝坂式中核地帯のものと比べると、器形のプロポーションや施文手法などで違いが見られます。しかし、明らかに本場の勝坂式を意識した土器になっています。本場の土器を見た人が作ったものでしょうか。

火焔型土器

鶏頭冠突起

鋸歯状突起

妙音寺遺跡出土 火炎系土器

火焔型土器は新潟県を中心として分布する土器です。炎のような激しい装飾を施すのが特徴で、数ある縄文土器の中で最も有名な土器と言えるでしょう。縄文時代中期の中頃に現れ、中期後葉に至って忽然と姿を消す不思議な土器でもあります。

「火焔土器」は昭和11年に近藤篤三郎氏によって馬高遺跡から発見されました。この土器が炎を連想させるような装飾を持っていたため、「火焔土器」の名称で呼ばれるようになりました。本来、火焔土器とは、この馬高遺跡で見つかった1点の土器を指します。その後、類例が見つかるにしたがって、火焔土器と同じ仲間の土器ということで火焔型土器や火焔式土器などと呼ばれるようになりました。その後の発掘調査によって類例が増加すると、火焔型土器と同じ仲間で違う特徴を持った王冠型土器も知られるようになりました。それらを総称して火炎土器様式、あるいは最初に発見された遺跡名から馬高式などと呼ばれることもあります。

火焔型土器の特徴は、口縁部に鶏頭冠突起・鋸歯状突起が付くこと、縄文を用いずに隆起線や粘土帯によって浮彫的な文様を施す、などが挙げられます。新潟県を中心に分布しますが、福島県や群馬県、山形県など隣接する周辺地域にも分布します。しかし、周辺地域の土器は新潟県に分布するものとはかなり違いが見られ、火焔型土器と区別して「火炎系土器」と呼ばれます。

郡山市でもこの火炎系土器が多数見つかっています。火焔型土器と同じく鶏頭冠突起を持ちながら、胴部に縄文を施している野中遺跡の土器は有名です。この他、縄文を用いずに半肉彫的な文様を描くものもあります。中でも妙音寺遺跡で見つかった土器は、新潟県で見つかる火焔型土器とよく似た特徴（鶏頭冠突起、口縁部の鋸歯状突起、縄文を用いない半肉彫的文様）を有しています。本場の土器の作り方をよく知っている人が作った可能性があります。新潟県との交流の中で、土器作りの手法を学んでいったのかもしれません。

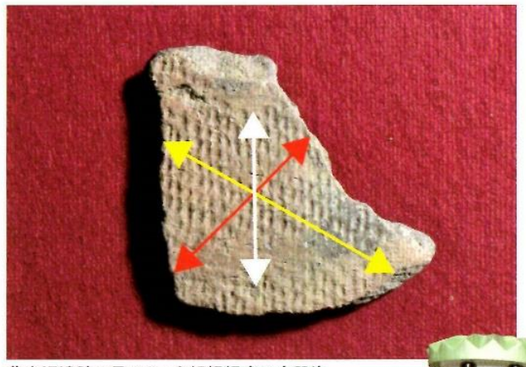
組縄縄文について

多くの縄文土器は、器面に縄を転がして文様を付けています。それが「縄文土器」という名称の由来にもなっています。この縄の文様は非常に種類が豊富で、転がす縄の撚りの方向や、撚り合わせる縄の本数などによって様々な模様になります。

曲木沢遺跡（西田町）から少し珍しい縄の文様を持った土器が見つかっています。今から約6,000年前に作られた土器で、その縄の文様は左上がりにも右上がりにも整然と並んでいるように見えます。また、縦方向にも並んでいるようにも見えます。

これは、岩手県や青森県に多く分布する「組縄縄文」という種類の文様です。通常の縄文は縄を撚り合わせて作りますが、組縄縄文は縄を組み合わせて作ります。縄の模様が整然と並んでいるので、「ぴっちり縄文」と呼ばれることもあります。

今から約6,000年前に東北北部地域との交流があり、その地方の手法が持ち込まれたのかもしれません。



曲木沢遺跡で見つかった組縄縄文の土器片

火焔型土器以後の土器について

長岡市中道遺跡出土土器（写真提供：新潟県長岡市教育委員会）

新潟県で火焔型土器が作られた頃、福島県は大木8a式土器が流行する時代でした。竹管状工具で渦巻文を描いたりするのが特徴で、口縁部には立体的な装飾を施すものもあります。郡山市で火焔型土器から影響を受けたと思われる土器（火炎系土器）が作られるのもこの時代でした。

大木8a式土器に続くのが大木8b式土器です。粘土紐による隆線と竹管状工具による沈線を組み合わせて立体的な渦巻文を描くのが特徴的です。福島県で大木8b式土器が流行する時代になると、新潟県では火焔型土器が作られなくなるようです。理由ははっきりとわかっていません。

火焔型土器が作られなくなると、新潟県では東北地方の大木8b式土器に類似した土器が流行します。写真の土器は長岡市の中道遺跡で出土したものです。全体的な器形、渦巻文の施し方、突起の作り方などが東北地方で見つかるものとよく似ています。

東北地方では新潟県の火焔型土器の影響を受けた土器が多数作られましたが、新潟県でも東北地方の影響を受けた土器が作られていました。交易などを通じてお互いに影響を与えあっていたのでしょうか。